

直前早慶大英語

【3 回目】



問題

【1】

解答

(1) d (2) ② - A c ② - B b (3) c (4) a

(5) Would it not have been wiser, he asked, to die (fighting for good laws instead of insisting on observing lethal) ones?

(6) d (7) d, e, h, j

全訳

1947年11月初旬、国全体がある事件によって衝撃を受けた。この事件は食糧危機に対応する際の政府の無能ぶりをほとんど病気以外の何物でもないと思わせるものだった。遅ればせながら、報道機関は山口良忠という名前の33歳の判事が20日前に餓死したことを報じたのだ。山口判事は軽微な経済犯罪を集中的に扱っていた東京地方裁判所の小部門を担当していた。ここで扱う事件の大半が闇市の取引に関係するものだったが、本当の悪徳業者が山口判事の前に姿を現すことはなかった。山口判事が判断を下すことを求められていた人たちは事実上すべて、生活の収支を合わせようと悪戦苦闘していた切羽詰まった男女であった。

山口判事の妻は、自身が判事の娘であったが、夫が話してくれたある事件を後に思い出して語った。その事件は72歳の老婆に関わる事件で、老婆の息子は戦争から帰還せず、義理の娘は空襲で死んでいた。逮捕された時、老婆は着物などの自分の持ち物を売り、闇市で食糧を買って2人の孫に食べさせようとしていた。老婆は常習犯であったので、山口判事は刑務所に服役させる判決を下す他はなかった。

山口判事の小さな法廷は、事実上、不条理劇を演ずる国民劇場の小さな舞台になっていると言ってもよかった。実業家、政治家、元軍人たちが闇市で大儲けをし、政府の役人たちがアメリカから来た権力者たちに惜しげもなく酒や食事をふるまっている一方で、1946年にはおよそ122万人の一般人が違法な闇取引の罪で逮捕され、この数字は翌年には136万人、翌々年には150万人に上昇した。この若い判事の個人的見解では、自分の前に連れて来られた人たちは有罪と思う他なかった。けれども、山口判事自身の家族も基本物資を闇市に頼っていたのである。山口判事が亡くなる半年前、大衆誌が短い記事の特集し、闇市の規制がすべて厳格に実施されていたら、国民のすべてが刑務所に入らなければならなかっただろうと結論づけた。

この道徳上のジレンマに対し、若い山口判事は、法律に異議を唱えるのではなく、むしろ個人的に法律に従って生きるという対応をとった。つまり、彼が妻に語ったように、良心に恥じないよう自らの義務を遂行し、同時に国民の苦しみを共にしたのであった。1946年のある時、彼は妻に、子供とお前のために闇市の食べ物を買うことはやむを得ないが、自分には配給であってがわれた物以外を食べさせないでくれと頼んだ。それ以降、山口家が合法的に手に入れた食糧、特に米の大半は子供に与えられた。山口判事の妻はその後、自分と夫が塩水以外は何も口にしなかった日々を語っていた。山口判事は1947年10月11日に亡くなった。

山口判事の死は、当時いたる所で分析の対象となったが、衝撃と称賛、そして若干の批判を引き起こした。例えば、山口判事をソクラテスにたとえることが流行った時、1人の市民

が異議を唱えた。国民を死に追い込むような法律を守ることにこだわるよりも、よい法律を作るために闘って死ぬ方が賢明ではなかっただろうか、と疑問を呈したのだ。この後すぐに、最高裁判所長官の三淵忠彦は、腹藏のない話し合いの中で、山口判事が執行することを迫られた法律は、実効的ではなかったかもしれないが、闇取引を抑制し生活の基本物資をもっと容易に入手しやすくするという究極的には有益な目的をもっていたとの所見を語った。と同時に、彼は食糧管理法に違反しないことよりも生き延びるほうが重要であることをしつこく認めた。

【配点】 29 点

- (1) 2 点 (2) 4 点 (各 2 点) (3) 2 点 (4) 2 点
(5) 5 点 (6) 2 点 (7) 12 点 (各 3 点)

【配点の目安】

- (5) 部分点なし。ただし、つづりのミスは 1 単語につき、- 1 点。

【2】

解答

- (1) ① b ② c ③ b ④ b ⑤ a ⑥ c ⑦ a (2) c
(3) c, e

全訳

トマス・エジソンは、白熱電球の赤々と輝くフィラメントを作り上げるために何千という異なる素材を試した後、ようやくうまく機能する素材を見つけた。「私は失敗したのではない。うまく機能しない 1 万通りのやり方を見つけたただけだ」とは彼の有名な言葉である。エジソンは、すべての失敗はこの世界についての真実を明かしていること、また予想外の結果はまったく新しい——時には画期的な——発見をもたらすという意味において、しばしば非常に興味深いものであることを知っていたのである。予期しない観察によって、放射能やペニシリン、宇宙の黒体放射といった数多くの重要な発見が生み出された。有名な物理学者であるマックス・プランクはこう言っている。「実験は科学が自然に突きつける質問であり、測定は自然からの回答を記録したものだ。」

創造性は、以前に行われていなかった事柄を行うことが求められているという意味において、科学の研究と似ている。だから創造的試みは本質的には実験なのであり、もしその試みが本当に独特なものであるなら、何が起こるかはわからないのである。素晴らしいことに、人は誰でも実験に関してはすでに膨大な経験を積んでいる。全人生は、唯一無二の 2 つの細胞が一緒になり人を創造する懐胎の瞬間から始まって、日々の一瞬一瞬の立案を企てる今日に至るまで、1 つの大きな実験だと言える。赤ん坊の頃から、私たちは身の回りの世界がどのように動いているかを試すためにさまざまな実験を行っている。泣き叫んだら何が起こるか、笑ったら何が起こるか、私たちは自然に理解する。歩き方や話し方を身につけるにも一連の長い試行錯誤による実験が必要である。年齢が進むにつれ、同じような実験を行って、読み方や書き方を理解したり、また、いつ話し、いつ耳を傾けたらよいかを理解していく。誰も人生の台本など持っていないから、毎日が何が起こるかを理解するために新しいことを試す数えきれない機会であふれているのだ。それぞれの実験は、期待通りの結果であるかど

うかにかかわらず、画期的な考えに通じる貴重な情報を提供してくれるのである。

実験を行うということは、単に個人の心構えというだけでなく、すべての組織や共同体の価値となるものでもある。創造性を高めたいと思う人は、結果がまったく不確かな場合であっても、今まで行っていなかった事柄を試してみようと心を開いておく必要がある。加えて、もっと革新的でありたいと思っている組織は、実験を支援し、実験が期待通りに進展しなかったことを理由に個人が罰せられることが決してないことを伝えておく必要がある。結果として、実験はイノベーションエンジンの2つの場所、つまり態度と文化に密接に関係することになる。それぞれの共同体は実験を奨励するようになっていなければならないし、また個人は自由に実験ができると感じるべきではない。

残念なことだが、実験をしたいという私たちの生まれながらの性向は伝統的な教え方や職場環境によって支援されることも、奨励されることもないのが普通である。というのも、伝統的な世界では、何をすべきかを、先生は講義で教えてしまうし、管理者は従業員に伝えてしまうからだ。マサチューセッツ工科大学のローラ・シュルツが行った最近の研究によると、人々に事実や特定の指示を与えることは、自分で情報を発見するように仕向けるよりもかえって、人々の生まれながらの実験心を阻害するだけでなく、好奇心も弱めてしまうという。ここに、この研究についてジョナ・レーラーがまとめた記事からの短い抜粋がある。

「この研究は4歳児に4つの管のついた新しいおもちゃを与えることから成り立っている。このおもちゃの興味深いところはそれぞれの管が違ったことをすることだ。例えば、ある管はキーキーという音を作り、別の管は小さな鏡に変化した。」

最初のグループの生徒たちは、科学者からそのおもちゃを見せられ、科学者はこのおもちゃは今しがた床の上にあったのを拾ったことを明らかにした。次に、そのおもちゃを子供たちに示しながら「偶然に」管の1つを引っ張って、キーキーという音を出した。科学者はすごく驚いたという反応を示した。「何これ？ みんな見た？ もう一度やってみるよ。」第2のグループは、これとは対照的に、まったく違ったプレゼンテーションを受けた。驚いたふりをするのではなく、科学者はごく普通の先生のように行動した。生徒たちに、新しいおもちゃを買ったこと、それがどう動くかを実演して見せたいと語った。それから慎重におもちゃをキーキーと鳴らしたのである。

先生の実演が終わった後、2つのグループの子供たちはおもちゃを与えられ、遊ぶように言われた。当然のことだが、子供たちのすべてが最初の管を引っ張ってキーキーという音を聞いて笑った。だが、次に興味深いことが起こった。第2グループの子供たちはおもちゃにすぐに飽きてしまったが、第1グループの子供たちはおもちゃを使って遊び続けたのだ。子供たちは、キーキーという音に満足せず、他の管も調べ、隠されていたさまざまな驚きを見つけ出した。この研究に関係した心理学者たちによると、異なった反応は指示の与え方によってもたらされたという。はっきりとした指示を与えられると、つまり何をやる必要があるかを教えられると、子供たちは、そのような指示を与えられない場合よりも、自分で探求しようとする気持ちが薄れるのだ。好奇心とは壊れやすいものである。

初めて会う人に自己紹介したり、新しい食べ物を食べてみたりするようごく単純なことを行うときでも、私たちは毎日毎日実験を行っているということを心に留めておくことは重要である。そうすれば、思いがけない結果に対応してそれぞれの結果から学習することを練習する

機会がたくさん得られるのである。訓練された科学者はこのことを十分に心得ていて、だからこそ、具体的な結果はどうであれ、重要な疑問に答えてくれるような実験を工夫することに最善を尽くすのだ。科学者はそれぞれの実験が理解に至る貴重な手掛かりを提供してくれることを知っている。諺にもある通り、「天才とは最短の時間で最も多くの誤りをおかす能力である」。間違いの1つ1つが実験の資料と新しいことを学習する機会を提供してくれる。私たちが、科学者と同じように、予期しない結果を失敗として見ることをやめる必要がある。私たちの語彙を変えることによって、つまり「失敗」を「資料」として見ることによって、私たちは実験したいというすべての人の気持ちを高めることができるのである。これは素晴らしい考えである。

【配点】 25 点

(1) 14 点 (各 2 点) (2) 5 点 (3) 6 点 (各 3 点)

【3】

解答

(1) c (2) d (3) c (4) b (5) [A] (6) (E) a (F) a
(7) d (8) 「全訳」の下線部⑥参照。

全訳

脳が驚異であることは疑いがない。最も凡庸な頭の中でも脳は毎秒ごとに複雑な奇跡を行っている。これと同じくらい驚くべきことは、私たちが脳について非常に多くを知ることになったことだ——もっとも、知識が増える場合にはいつもそうであるように、私たちは同時にまだまだ学び足りないことも思い知ったのではあるが。

けれども大きな謎がまだ残っている。それは、脳の何十億のニューロンが何兆という連結を通し、入り組んだ、超高速の、非常に複雑なやりとりをすることで心が生まれるのかということである。この謎を説明するよく知られた方法がたくさんあるが、最も簡単なものは次のように言うことだ。脳の中の物理的出来事は時間の持続性や空間の位置、測定可能な強度、明瞭に説明できる一連の生理学的構造といった物理的特性を持っているが、一方、考え（例えば、サブプライム抵当権とかブルガリアの政治状況についての考え）はそういうものを持っていない、つまり、重さも色彩も臭いも、その他のそういうたぐいの物理的特性をまったく持っていない、と。

この説明はかつては、心と肉体は別々でありまったく異なったものであると考える理由と受けとめられ、その結果、心と肉体の関わりについて以前にもまして大きな謎を生み出すことになってしまった。現在ではこのような見解を真面目に受けとめる人はほとんどいない。だから、残された謎は、それに代わり、脳の活動がどのようにして経験という豊かで色あざやかな現象学を、無意識の精神作用という錯綜した神秘の世界を、そして個人を独特たらしめている人格と記憶の永続的様式を生み出すか、になったのである。

1つの有力な学派によると、私たちが心についてあれこれと考える方法として、私たちの頭の内部にあるものを越えて頭の周囲にある物理的社会的環境をも考察の対象とする方法が必要だとしている。この考え方は、ある概念を理解した時に私たちが知っているものの中には、脳の出来事と外界の事物との関連性が含まれていなければならないという考えに誘発されたものである。

明白な例を1つ出してみよう。花の概念を理解し花と花以外の物（例えば、木や建物）との区別ができるためには、頭の中の関連する生理学的出来事が頭の外の花と花ではないものとの明確に限定された関係の中に立っていなければならない。[A] この関係が経験上のものであることもまた明白である。つまり、頭の所有者と花あるいは少なくとも花の写真との間に、ある時点で、実際の知覚的な出会いがなされていなければならないのだ。

しかし、花の概念を持つことのこれほど明白ではない1つの例をあげよう。私たちが花について考えたり話したりする時はいつでも、私たちの頭の中で起こっていることと頭の外にある花との関係は、私たちの会話が正しく花についてのものであって他の物についてではないようにするために、常に一定の形におさまっていなければならないということである。これは何も神秘的なことや魔術的なことを意味しているのではない。他の物についての思考とはっきりと区別された花についての思考とを説明するためには、外界にある花への言及は避けることはできないということの意味しているにすぎない。

思考というものはこのように外界と「本質的に」関連しているという考え方は、「心」は脳の活動だけから説明できるものではなく、その活動と外部の社会的物理的環境の関係として理解されなければならないという、より一般的な考え方を示すことを意図している。哲学者は、考える人とその環境との関係を視野に入れてはじめて適切に説明しうる考えに「広い内容」という名前を与えていて、一部の哲学者は「狭い内容」——つまり、考えている人の環境から離れて頭蓋の中で起こっていることだけから明瞭に説明できる考え——といったものは存在しないと主張している。

もし「広い内容」しかありえないということが正しいとするなら、それが意味するところは非常に大きい。なぜなら、それは心を理解するには脳だけを理解することでは不十分であることを意味し、言語や社会や歴史も含むことになるからだ。

これは文化や創造性と関係することを探ろうとする場合には十分に明白なように思われる考え方である。例えば、ある芸術家を理解しようする場合、私たちは、当然のこのように、その芸術家を作りあげる要因となった影響力、歴史的状況、経験などに目を向ける。ところが、脳が精神的現象をどのように生み出すかを考える時には、私たちは脳を包んでいる頭の外部環境の重要性を低く見る傾向があるのだ。次の事例を考えてみよう。知覚の精神生理学に関連する場合ですら、知覚関係の末梢部分の性質はごく最小限しか明らかにされておらず、頭の中の装置（視神経や視覚野）が主な研究対象となっているだけである。もちろん、物が見えるということを理解するにはそうあるべきなのだろうが、このやり方では、何が網膜の桿状体かんじょうたいと錐状体すいじょうたい並びに視神経の発火を刺激するのに関しては、多分、外部から目に入ってくる光がこれこれの振動数で振動するということ以外は何も語られないことになるだろう。

⑥ しかし、物が見える仕組みを理解することは未だ視覚的認識を理解することとは言えない。これは、私たちは決してただ対象を見ているのではなく、常に「あるものとして見ている」
ということに気が付けばわかる。視覚的体験では常に概念が利用され、これらの概念は、水晶体の向こうに、つまり外部にある周囲の世界に存在する物の概念なのだ。これがわかると、心を生み出す脳と対立するものとしての心を理解するには「広い範囲」のアプローチが必要になると言いたくなるのである。

【配点】 25点

- (1) 2点 (2) 2点 (3) 2点 (4) 2点 (5) 4点
 (6) 4点 (各2点) (7) 2点 (8) 7点

【配点の目安】

- (8) 以下のように2つの区分を設定する。単語レベルのミス・脱落は1件につき1点減点とし、区分を超えて減点はしない。
- ① But understanding vision is not yet understanding visual perception. (3点)
 vision と visual perception の訳し分けが曖昧なもの - 2点
- ② For note that we never just see, but always 'see as' (4点)
 For 以降が前文の根拠を述べていると解釈できていないもの - 2点
 never A but B (決して A ではなく B) の関係を掴めていないもの - 2点

【4】

解答

- (1) b (2) b (3) b (4) b (5) a (6) a

解説

- (1) 「そのような派閥主義は遺憾である。」
 ○ regretful 「(行為・表情が) 遺憾の意を表す」
 ○ regrettable [rɪɡrətəbl] 「(事が) 遺憾な」
- (2) 「その子供たちは、母親の元から力ずくで連れ去られた。」
 ○ forcefully 「力強く」
 ○ forcibly 「力ずくで」
- (3) 「アリは勤勉な昆虫だ。」
 ○ industrial 「産業の」
 ○ industrious [ɪndɪstriəs] 「勤勉な」
- (4) 「私に忠告してくれるなんてあなたはなんて思いやりがあるんだ。」
 ○ considerable [kənsɪdərəbl] 「かなりの」
 ○ considerate [kənsɪdərət] 「思いやりがある」
- (5) 「小型車は低燃費で経済的だ。」
 ○ economical [ɪkənómɪkl] 「経済的な」
 ○ economic [ɪkənómɪk] 「経済の」
- (6) 「これらの花はいい香りがする。」
 ○ smell ～ 「～の匂いがする」 ‘～’にくるのは形容詞。

【配点】 6点 (各1点)

【5】

解答例

- (1) This is how I got to know her. [This is the way I came to know her.]
- (2) With the increasing number of cars [As cars increase in number], traffic accidents are (also) increasing.

- (3) I went to Hokkaido last summer and visited many places.
 (4) It is as warm as an early spring day today. We might call it an "Indian summer" day.
 (5) I'm afraid I have to decline your kind invitation because of a previous engagement.

解説

- (1) 「ぼくが彼女と知り合ったのはこういう次第です。」
 「～なのはこういう次第です」 This is how [the way] ～ ‘～’の部分には節がくる。
 「彼女と知り合った」
 come to know her … (自然に知り合った)
 got to know her … (知り合うために努力した)
- (2) 「車が増えるにしたがって事故の数も増えている。」
 「車」 a motor vehicle, a motorcar, an automobile, a car
 「車が増えるにしたがって」
 句を用いるなら → with the increasing number of cars (無冠詞の複数形)
 節を用いるなら → as cars increase in number
 「事故の数も増えている」
 この「事故」はもちろん「交通事故」のことなので traffic [car] accidents。「も」は無視してもよい。
- (3) 「去年の夏は北海道へ行ってあちこち観光した。」
 「去年の夏は」
 last summer を文頭にもってくると了解事項となってしまう普通ではない。I went to Hokkaido の後に置くのが自然。
 cf. A : I went to the park *yesterday*.
 B : *Yesterday* I went there, too.
 「あちこち観光した」
 「多くの場所に行った」と考えて、visited [went to] many places とする。I went to Hokkaido last summer で書き出した場合は、visited many places の方を採用するのがよい。
- (4) 「今日は春先のようないい日和だ。こんなのを『小春日和』と言うのだろう。」
 「今日は春先のように暖かい」と考えればよいが、この場合「普通と違って」という意味合いがあるので mild ではなく warm を用いる。
 「今日は～だ」 It is ～ today.
 「春先」 early spring, the beginning of spring, an early spring day
 「こんなのを～と言うんだろう」
 You [We] might call it ～. You は、この場合、話者をも含む。might は仮定法過去。
 「小春日和」
 an Indian summer day ; balmy [mild] autumn weather ; St. Luke's [St. Martin's] summer
 ※ an Indian summer day とは、10月末から11月頃の急に暖かさが戻った日を言う。
- (5) 「先約がありますので、残念ながらご招待は遠慮させていただきます。」

「残念ながら」

I'm afraid ~. [I regret to say ~.; I'm sorry ~.]

「ご招待は遠慮させていただきます。」

「ご招待はお断りしなくてはなりません。」と考える。

I have to decline your (kind) invitation.

「先約がありますので」 because of a previous engagement

本問のような問題では、こういった状況にこういった表現が対応するのかと考えればよいのであるから、

I regret that a previous engagement prevents me from accepting your kind invitation. としてもよい。

【配点】 15 点（各 3 点）

【配点の目安】

文構造の誤り 各－2 点

単語のつづりの誤り 各－1 点

文法・語法の誤り 各－1 点



会員番号

氏 名